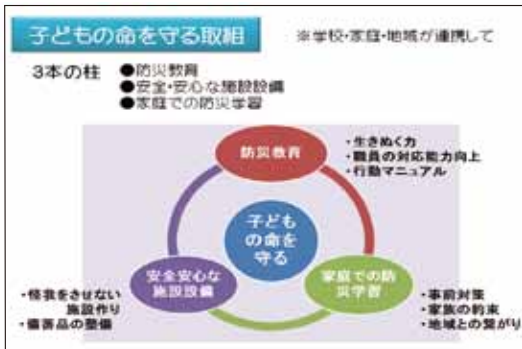




和歌山県立みくまの支援学校
校長 榎本 幸夫

本校は、和歌山県南部2市4町の児童生徒86名が在学する知肢併置型の特別支援学校です（職員81名）。南海トラフに近く、地震発生時には激しい揺れと津波の襲来による甚大な被害が想定されていることから、近年特に地震・津波対策に力を入れています。「子どもの命を守る取組」は、災害から子どもたちを守るため、「防災教育の充実」、「家庭防災の促進」、「安心・安全な施設作り」を3つのテーマとし、平成25年度よりPTAとともに取組を進めています。

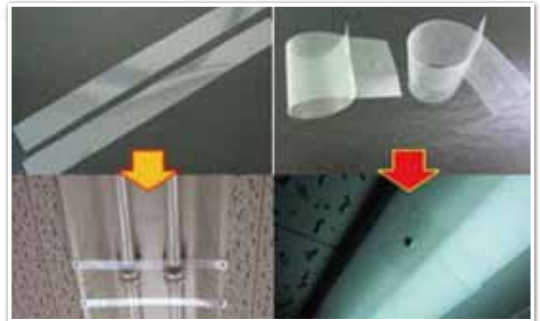


テーマのひとつである「安心・安全な施設づくり」では、学校内施設で児童生徒全員が負傷することなく無事に避難できることを目指して、定期的な安全点検を始めとして、校内全ての大型家具の固定や、ガラス・鏡の飛散防止、蛍光灯の落下防止などの対策を講じてきました。加えて、校舎内にブルーの床シートで「セーフティゾーン」を設定し、児童生徒が自ら或いは教職員の誘導で安全な場所に速やかに退避できる環境を整えました。更には、これら施設の整備に併せて

職員の行動マニュアル改訂を行い、セーフティゾーンを活用し、児童生徒の能力・特性に応じた有効な避難方法の具体化を図りました。

1 蛍光灯の落下防止

安全な施設作りに取り組む中で、大きな課題となったのが蛍光灯の落下防止対策でした。学校の蛍光灯の数は1,000本に及ぶことから、蛍光灯を取り替えたり、市販の落下防止器具を取り付けることは予算的に非常に困難であると思われました。そこで、独自に器具を考案・製作し、取り付けを行うことにより、校内の蛍光灯の全てに蛍光灯落下防止対策を施しました。



器具は、耐熱性のあるポリプロピレンシートをカッターで切り、簡単に加工したものを蛍光灯器具の鉄部にビス止めしました。取り付けも容易で、蛍光灯1本につき2か所用い、総工費2万円程で施工することができました。

2 セーフティゾーン

突然の揺れや緊急地震速報発令時にど

ここが安全なのか、どこに逃げればいいのかを明確にするために、教室や廊下の特に安全であると思われる場所（63か所）にセーフティゾーンを設置しました。これは、教職員全員による災害演習により、本校児童生徒の実態から予想される状態（パニック・突発的な行動など）を細かく想定し、その対応ができる設備や避難行動のあり方について検討を重ねた上で具体化したものです。



①ガラス飛散防止 ②蛍光管落下防止 ③掲示板固定補強
④セーフティゾーン ⑤ウエットティッシュ ⑥ヘルメット
⑦避難マニュアル

本校の児童生徒にとって、地震が来たら机の下に隠れて脚をしっかりとって……といった従来型の方法では、安全確保が困難であると予想されます。そのような対処に代わり、緊急地震速報発令時にすぐにセーフティゾーンに連れて行き、低い姿勢を取らせ、教員が庇う格好で取り囲む。こうすることで、落下物や家具の移動などから子ども達の身体を守るとともに、パニックによる突発的な行動を抑制するという方法を考えました。更には、21か所にヘルメットとノンアルコールウエットティッシュを常備し、行動マニュアルを掲示しました。揺れが収まった後、ヘルメットの装着とウエットティッシュで防塵対策をし、靴を履いていることを確認した上で、周囲の状況確認を行い、安全に避難する方法を取り入



れました。

このように、施設の整備と児童生徒の実情に合った避難行動を関連付けることによって、より安全な地震への対処方法の確立を図りました。

3 今後の取組

これまで、校内での施設の安全化を図り、それを活かした適切な避難行動のあり方を検討してきましたが、まだまだ多くの課題があります。そこで、今年度より新たに学校防災プロジェクトを組織し、教職員や各分掌の役割を明確化してその連携を強めることで、学校防災力の向上を目指しています。

「防災教育の充実」では、授業はもとより、学校生活の様々な場面に防災の要素を加味することで、自らの命を守ることでできる力を培う教育の推進や「家庭防災の促進」をPTAとともに取り組み、保護者の防災意識の向上と各家庭での対策促進を図りたいと考えています。

「安心・安全な施設作り」においては、登下校に津波浸水想定域を運行し、災害時には非常に厳しい状況が想定されるスクールバスの安全確保について、喫緊の課題として捉え、関係機関と連携を取りながら進めていきたいと思ひます。

今後も、各方面よりご指導を仰ぎ、教職員が一丸となって、みくまの支援学校の防災力を高め、「子どもの命を守る取組」の更なるの推進を図っていく所存です。